

「自分」を生きるためのとしび

緑が丘中学校 三年 鈴木 柚花

もし、自分の家族に障害のある人がいたら私は自分の人生よりも家族の笑顔を優先できるだろうか。落合由佳さんの「君の火がゆらめいている」を読み終えたとき、私の心にはそんな重い問いが突きつけられていた。本書の主人公、葉澄には発達障害のある双子の姉、菜々実がいる。葉澄は小六から中三という多感な時期を、姉の送迎や世話を手伝いながら過ごしている。彼女は家族を愛しているし、みんなに笑ってほしいと願っている。しかしその裏側で、友達と遊ぶ時間や自分の希望をいつも後回しにし、胸の中に「モヤモヤ」をため込んでいく。私はこの本を通じて、これまで知らなかった「きょうだい児」と呼ばれる子どもたちの深い葛藤を知ると同時に、自分自身の生き方や、他者と向き合う時の姿勢について深く考えさせられた。

私がまず衝撃を受けたのは、葉澄が抱える「がまん」のあり方だ。彼女にとって、姉のために自分の予定を諦めることは、もはや日常であり「仕方がないこと」になっていた。しかし、その「仕方がない」という言葉は、自分の本当の気持ちを無理やり抑え込むための呪文のようにも見えた。私自身日々の生活の中で親から「お姉ちゃんなんだから」と言われたり、周囲の空気を讀んで自分の意見を引つ込めたりすることがある。だが、葉澄の抱えるそれは、私の経験とは比べものにならないほど重く、逃げ場のないものだった。家族の役に立ちたいという優しい気持ちがあるからこそ、自分の「自由になりたい」という願いがまるで悪いことのように思えてしまう。その優しさと自己犠牲の境界線に立つ葉澄の苦しさ、読んでいて本当に切なかった。

そんな葉澄の転機となったのが、同じきょうだい児の集まる「きょうだい会」で出会った同世代の恵太の存在だ。恵太はいつも明るくからりとした態度をとっているが、その裏には複雑な怒りや諦めが隠されていた。同じ立場だからこそ分かち合える本音。葉澄は彼らとの交流を通して、自分が抱えていた孤独の正体に気づいていく。この場面を読んで、私は「平気そうな人の心の奥」を想像することの大切さを学んだ。学校でも、いつも元気で笑っている友達が、実は家庭や人間関係で大きな悩みを抱えているかもしれない。私たちは外側に見えている姿だけで、その人のすべてを理解したつもりになりがちだ。しかし、声にならない SOS や、笑顔の裏に隠された涙があることを忘れてはならないと感じた。

物語が進み中学三年生になった葉澄は、進路の選択を迫られる中で「自分の未来を、自分で選んでいいのか」という最大の葛藤に向き合う。障害のあるきょうだいのために生きることが家族の幸せなのか、それとも自分の人生を歩むべきなのか。この本のタイトルにある「火」とは、誰かを大切にしたいという思いであると同時に、自分として生きたいと願う「命のとしび」や「良心」なのだと思う。強く燃え盛る炎ではなく、ゆらゆらとゆらめく火だからこそ、迷いや弱さ、怒りという複雑な感情をリアルに表している。

私は、葉澄が「家族を大切にしながらも、自分の未来を選んでいい」と思えるようになるまでの心の変化に、同じ中三として強く共感した。私たち中三は今、まさに自分の進路や未来を自分の手で選び取ろうとしている。もちろん、受験や将来に対する不安はある。しかし、それは誰にも縛られていない自由な選択

の権利があるからこそその贅沢な悩みなのかもしれない。葉澄のように、家族のことを第一に考えるのか、自分の未来を自分で決めるのか、選ぶこと自体に罪悪感を抱かなければならない環境を想像すると、自分がどれほど恵まれているかを痛感する。

この物語は、分かりやすいハッピーエンドでは終わらない。これからも葉澄たちの日常は続き、問題がすべて解決するわけではないからだ。しかし、彼女の心の中にある火は、もう消えることはないだろう。揺れながらも、自分の足で人生を歩み出そうとする彼女の姿に、私は大きな勇気をもらった。

これからも社会を生きていく中で、私は困っている人や支えを必要としている人に寄り添える人間になりたい。それと同時に、誰かの犠牲の上に成り立つ幸せではなく、一人ひとりが自分の「火」を大切にしながら互いに尊重し合える優しい社会を作っていく一員でありたいと思う。自分の人生の主人公はいつだって自分自身なのだと、この本は私の心に静かに、しかし力強く教えてくれた。